

大段 智亮 著 わたしの助力論 病気のなかの人間関係

今までに出会ったあの患者、この患者を思い出しながら私はこの本を読んだ。いつのまにか読むことをはなれ、記憶の中に立ちもどり、思いにふけることも何度かあった。ほんとうに、人の心は何と弱々しく、面倒で、そしておかしいものであろうか。

臨床家は“いわゆる患者の心理面への対応”ということについてさまざまな遍歴を踏む、と私は思う。人の心の問題に目覚める頃の一種の自己陶醉期（もちろん本人は気付かないが）、懸命に心理の真理を学び求めて応用してみようという時期、そして、心理的知識や技術よりも何よりも、要は、心のあたかさを相手に対し持ち続けられるか否かなのだ、という心境に至る時期など。

ひそやかにしのびよる危険は、そういう自分自身の結論の上に自分の行動が安住してしまうことの中にある。そのことを警告するのは、患者であり、そして本書のような本である。

実をいうとこの本のはじめの部分は、当世風の、全面否定、告発調を帯びているので、またかという気になった。次の一節は、本書をつらぬく1つの基調をよくあらわしている。「……現代の文化と社会が全般的に対人援助能力というものを失ない、真実の人間関係の破綻を促進する方向に進んでいることはたしかで

ある。しかしそのなかで、まちがった援助方法を最も明確なかたちで実践しているのは、むしろ医療・福祉・教育といった『援助専門家』として社会的に公認された人たちである」と。

にもかかわらず私は、この本を最後まで読んだ。著者には申し訳ないが私はこれを通勤電車の中で読んだのだけれど、じきに目的駅に着いてしまうのが惜しく思われたことも何回かあったのである。

何が読者をひきつけるのだろうか。

1つは、静かな文体の底にある、著者自身の“熱き血汐”なのではあるまいか。現代社会の、つまり人々の援助のまずさ、冷淡さを嘆く調子があまりに深いので、その純粋さというたれ、著者の主張を最後まで聞いてみようという気になるのである。

第2は、紹介されているさまざまなエピソードが、読者を立ちどまらせ、心の本性や援助のあり方について考えこませることである。柴犬ケンの話、少年フェデリコの話、ある病棟婦長の新しい経験、などを私は感慨をもって読んだ。自分の体験をよびおこし、反すうし、結局、新たな共感と驚きとを心に刻みつけたのであった。

第3は、著者の否定する「教示的」「慰撫的」「恵与的」援助法に関して、である。そんなことはしてい

ないつもりでも、待てよ、ほんとに大丈夫かな、という気持がおこる。自分の出会った事例の1つ1つについて、点検をせまられるのである。

著者がロジャースのカウンセリング理論の立場に立つことは明らかにされているが、本書の性格は、クライアント中心主義、人間の自主性尊重主義の正しさの主張であるといっていよい。著者自身が療養生活の体験者であることもその説得性を強めている。では、正しい援助法を身につけるのにはどうすればよいのか。本書で示めされているのはロールプレイングによる新しい学習法であるが、予定の続巻にはその多くが語られるものと期待したい。

私は、人間の本性に関する一般論の他に、日本文化の特性や個人の社会体験による相違、同じ「援助」職でも患者やクライアントに出会う場や動機の違いというものが気になっている。しかしそれは、おそらく各読者にまかされる課題なのであろう。

自分と患者の出会いのそれぞれを反省し、心の機微への感受性を低めないようにしようという意識を持ち続けさせるのに、この本はよい本である。臨床的な仕事をする人にもやっぱりすすめたい本の1つである。

A 5・頁246・¥1600、〒140

（東京都老人総合研究所障害研究室
作業療法士 鎌倉 矩子）

医学書院刊